

自主体験学習を支援する情報基礎

～教科間連携の試み～

兵庫県立伊丹北高等学校教諭 佐藤 勝彦

1. はじめに

本校は総合学科である。総合学科の特徴のひとつに、「情報に関する基礎的科目」と「産業社会と人間」の2科目を全員が履修することがあげられる。この2科目は新学習指導要領における普通教科「情報」と「総合的な学習の時間」の先取りのものである。本校ではさまざまな場面でこの2科目の間での連携を行っている。今回は、「産業社会と人間」の中の自主体験学習の場面での「情報基礎」と「産業社会と人間」の連携について報告する。

2. 「情報基礎」と「産業社会と人間」の概要

まずはじめに「情報基礎」と「産業社会と人間」の概要について述べる。「情報基礎」「産業社会と人間」とともに本校では全員履修科目として1年次に2単位ずつ設置している。「情報基礎」では、情報の受信・発信を中心にいかにして相手に情報を伝えるかの学習に主たる目的を置いている。「産業社会と人間」では、自己を見つめ自分の進路希望や将来について深く考えることで、高校生活およびその後の生活の中で何を学ぶべきかを考えていく。その中には情報通信機器を活用した学習が有効な場面も多い

が、3クラスまたは6クラスの同時展開で授業が展開されるため機器を利用する環境の確保が難しい。その部分を「情報基礎」の中で扱うことにより支援を行っている。また、「情報基礎」における情報の収集や発信の学習の際には、収集・発信の目的となるテーマの設定が必要であるが、「産業社会と人間」と連携したテーマを扱うことにより、より現実と密着し、かつ収集・発信することの目的が明確な学習が可能となっている。

3. 「自主体験学習」とは

「自主体験学習」は「産業社会と人間」の中で夏季休業中の課題として設定された学習項目である。各自の進路希望や興味関心に基づいて活動を企画し、夏休みを利用して学校を離れた体験学習を行うものである。体験内容としては、ボランティア活動を行う者や、出版社や水族館など将来の進路希望の事業所での体験をするものなど多岐にわたる。大学への進学希望者が多数を占める本校の状況を反映して、大学のオープンキャンパスへの参加者も多い。それぞれの体験先については生徒自らが調べ交渉し依頼を行う。

実施前には1学期の「産業社会と人間」の授業の

「産業社会と人間」の主な学習項目

1学期

ライフプランの作成
2分間スピーチ
進路学習
社会人講話
自主体験学習

2学期

自主体験学習のまとめ
ディベート
進路校外学習

3学期

ライフプランの作成
総合学科発表会

「情報基礎」の主な学習項目

1学期

コンピュータの基本操作
ワープロによる文書作成・情報の加工
インターネットからの情報検索・収集
進路学習と科目選択

2学期

ウェブページによる情報発信
プレゼンテーションによる情報発信
マルチメディア・コンテンツの加工

3学期

表計算
マルチメディア・コンテンツの加工
作品制作

中で説明がなされ、目的・内容・学習先などを記入した企画書の作成課題が課される。この企画をもとに担任による指導がなされたのち、夏休みを利用して実際に体験学習を行う。2学期の初めに学習の結果をまとめた報告書を提出し、クラス内で発表を行う。他人に発表することで自分の体験を再確認し、また他の生徒の発表を聞く中で個々の生徒の体験を共有している。

4. 連携の概要

「情報基礎」の授業では「自主体験学習」の活動と次の2つの段階で連携している。まず第1段階は、実施前の企画立案の段階でインターネットを利用した情報収集を行う。そして収集した資料をワープロで加工し企画書の添付資料とする。第2の段階は、実施後の報告書の作成の段階で報告書のWeb化を行い体験の共有を促進する。

5. 企画段階の連携

6月に自主体験学習についてのガイダンスが「産業社会と人間」の授業でなされる。「自分の興味関心にしがって好きな場所を選んで体験学習をなさい。」と言われてもどこで何をすればよいのかを考えるのは難しい。兵庫県では中学2年時に「トライやるスクール」として学校を離れた体験学習を2週間実施している経験があるのでイメージは湧くようだが、それでも学習先を探すのは大変なようである。ちょうどその時期に「情報基礎」ではインターネットを活用した情報収集を学習内容として配置している。検索エンジンを用いた情報収集というどこかの学校でもやっているごく基本的な学習内容だが、その学習の教材として「自主体験学習」の企画のための情報収集を取り入れている。この分野の学習では「〇〇について検索エンジンを使って調べてみよう

う」というような形でテーマを与えて実習するのが一般的であるが、生徒の興味関心に即したテーマの選び方が難しく、また検索した情報が本当に役に立つのかの検証までなかなかとり着かず、ともすればなんとなく調べたというだけに終わってしまいがちである。「自主体験学習」の企画は「産業社会と人間」という別の科目で課せられたノルマであり、夏休みに自分自身が実際に体験しなければならないことなので、情報を検索することに対して興味関心という以上の強い動機付けがあるため、従来の情報の学習のための情報検索の教材に比べて積極的かつ主体的な学習の姿勢が見られた。

また、調べた情報の検証については、自分自身の企画に利用するという目的が明確であるため、使える情報とそうでない情報を判断する姿勢がはじめからできている点が従来の情報の学習のために設定したテーマとは大きく異なった。特に情報の新鮮さに対する検証という点では、夏休みという期間を区切った体験の企画は有効であった。検索エンジンを使うと多くの情報が検索されるが、その中には古くなってしまい利用価値のない情報も多く含まれる。オープンキャンパスの情報を検索する生徒が多く遭遇していたが、6月という時期の検索だと前年度の情報が書き換わっていないページに出会うケースや、トップページからのリンクは切れているがまだ削除されていない古いページが検索の網にかかるケースなどがあった。調べ学習にインターネットを使う場合より情報の鮮度がはっきりとわかる教材であった。また、インターネットが世界規模であるがゆえの使いにくさを体験した生徒も多くいた。ボランティア活動に取り組もうとした生徒が多く遭遇していたが、日本中のことが検索される割に、自分の参加可能な距離での情報だけに限定して検索することの困難さを実感したようである。また、インターネット上に載っていない情報も多くあり、最終的には別の手段とあわせなければ不完全だということもかなりの生徒が実感できたようである。

インターネットから検索した情報は、ワープロに貼り付け1枚にまとめて企画書につける添付資料とさせた。単に検索するだけでなく、それを加工してわかりやすい有効な資料とする活動と位置付け「情報基礎」の文書作成の実習課題とした。必要な情報を1枚に収めるためレイアウト等に工夫を凝らして取り組んでいた。

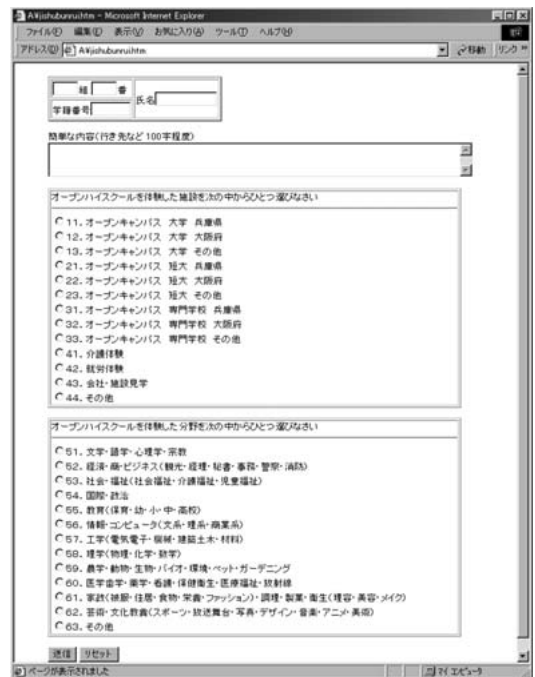


6. 実施後の連携

「自主体験学習」は個々の生徒にとっては自分自身が体験をすることで充分有効であるが、他の生徒の様々な体験を交流・共有することでさらに有効なものとなる。そのために「産業社会と人間」の授業ではクラス単位で全員が発表を行い、また各クラスの代表が学年全体で学習成果を発表することで、いろいろな興味関心を持った生徒の多種多様な活動を学年全体で共有し視野を広げている。「情報基礎」の授業では、「産業社会と人間」の授業での発表とは違った形でWeb形式での情報の共有を行っている。

2学期のはじめ「情報基礎」の授業はHTMLによる情報の発信を教材として扱う。その素材として「自主体験学習」の報告書を扱っている。「産業社会と人間」の授業では発表用の800字程度の原稿を作成している。この原稿をWeb化することによって情報の共有を学習する。まずエディタで原稿を入力し、何の装飾も加えずHTML化する。そのままでは非常に読みにくいということを実感させたのち、少しずつタグを加え読みやすい形に整形していく中でHTMLの基礎を学習する。具体的には、まず表の中に収め幅の設定によりレイアウトを可能にし、CELLPADDINGで表と文字の間隔を調整することにより読みやすくする工夫をした。そして、背景や文字の色を工夫して体験内容にふさわしい配色を探る中で、色彩の持つ情報伝達の効果を学習する。最後に企画の段階で参照したWebサイトへのリンクをつけて個人のページがタグによる装飾で個性あふれるページに変貌することでHTMLの果たす役割を実感させたいと考えている。

この個人のページをイントラネット上のWebサーバにおくことで情報の共有はできるが、個人ごとに作成したページはこのままでは順番に眺めていくしかない扱いにくい情報である。これを簡単な解説をつけてジャンルごとに整理することで、雑然とした情報に付加価値をつけることを体験させる。上図のようなCGIを用いて、生徒が自分の実施した「自主体験学習」の100字程度の概要と体験内容の分野を登録すると自動的に分野ごとに整理されたリンク



のページが生成される。ここに登録された情報を閲覧することで、同じクラスの生徒とクラス代表の生徒のもの以外聞くことのできなかった他の生徒の体験を共有することが可能になる。また、この蓄積されたページは同じ学年の生徒だけでなく、次年度以降の生徒の企画段階の資料として利用することも可能である。実際に2年目以降の企画段階では、インターネットからの情報収集と並行して過去の先輩の報告集も資料として閲覧させている。単にWebページを作成する以上に、誰に何を伝えるかという情報発信の目的の明確な教材ではないかととらえている。

7. 連携の成果と課題

「情報基礎」と「産業社会と人間」の連携は、「情報基礎」にとっても生徒の実生活に直結したテーマを得ることができる点で大きなメリットがある。連携により授業を活きたものにできると実感している。しかし、来年度からはじまる普通教科「情報」では現在の学校設定科目「情報基礎」と異なり教科として学習すべき内容が定められているため、教科内容の中に連携の部分をどう位置付け再構築するかが今後の課題となるであろう。